

# 劉茂雲畫集

吳報任題

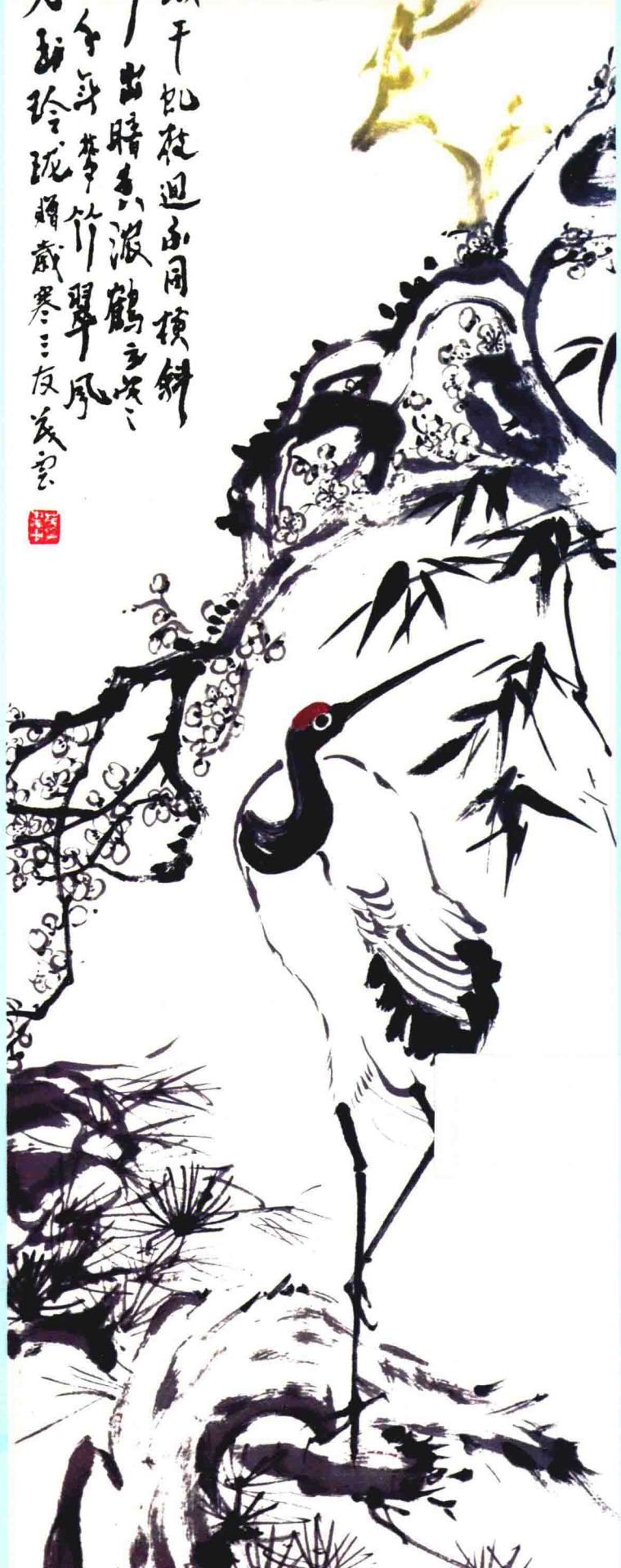


刘茂云 著 (中、英、日文)



合肥工业大学出版社

HEFEI UNIVERSITY OF TECHNOLOGY PRESS



# 刘天华文集

刘天华先生遗稿



（上海）上海音乐出版社



上海音乐出版社



# 劉茂雲畫集

吳報佳題



刘茂云 著  
(中、英、日文)

松竹梅鶴龜

茂雲



松竹梅鶴龜 / All for long live / 長寿の図

图书在版编目（CIP）数据

刘茂云画集 / 刘茂云著. —合肥：合肥工业大学出版社，2013. 10  
ISBN 978-7-5650-1546-5

I. ①刘… II. ①刘… III. ①中国画—作品集—中国—现代 IV. ①J222. 7

中国版本图书馆CIP数据核字（2013）第237654号

刘茂云画集

著 刘茂云		责任编辑 权怡	
出 版	合肥工业大学出版社	版 次	2013年10月第1版
地 址	安徽省合肥市屯溪路193号	印 次	2013年10月第1次印刷
邮 编	230009	开 本	889mm×1092mm 1/16
电 话	总编室：0551—62903038	印 张	8
市场营销中心	0551—62903163	字 数	190千字
网 址	www.hfutpress.com	印 刷	安徽联众印刷有限公司
E-mail	press@hfutpress.com.cn	发 行	全国新华书店

ISBN 978-7-5650-1546-5

定价：80.00元

如果有影响阅读的印装质量问题，请与出版社发行部联系调换。



Author Mr. Mao-Yun LIU \ 著者写真

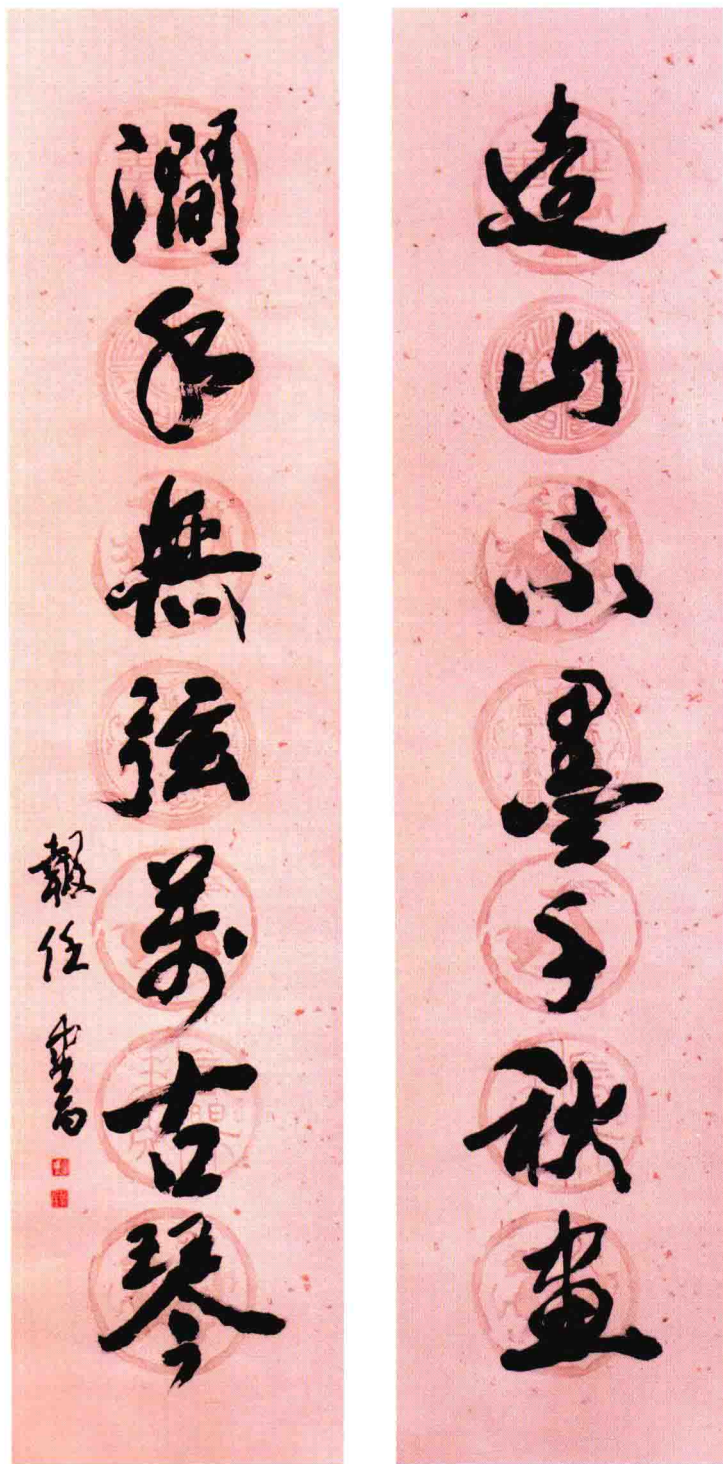




岁寒三友 / Friends in Winter / 冬の友



松原素道禅師  
 わ佛像はわが心のか  
 がみです お佛像  
 に見えるときは  
 お佛像から拝まれ  
 ている自分を発見する  
 のに外なりません  
 わたちが合掌して  
 ほとけに救いを求  
 める前にみほとけ  
 は私たちの身中に  
 蔵れている真実の  
 ちに手を合わされる  
 のです みほとけが人  
 間を拝むそれが仏教  
 の大いなる思想です



吴报任对联 / Congratulation words Bao-Ren Wu / 吴 报任



摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五  
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不  
異色色即是空空即是色受想行識亦復如  
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨  
不增不減是故空中無色無受想行識無眼  
耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至  
無意識界無無明亦無無明尽乃至無老死  
亦無老死尽無苦集滅道無智亦無得以無  
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無  
罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢  
想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故  
得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜  
多是大神呪是大明呪是無上呪是無等等  
呪能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜  
多呪即說呪曰  
揭諦羯諦波羅羯諦波羅僧揭諦菩提薩婆訶  
般若心經

為劉茂雲画集出版祝福

平成廿五年 六月廿一日 晚

二〇一三年六月二十一日 晚

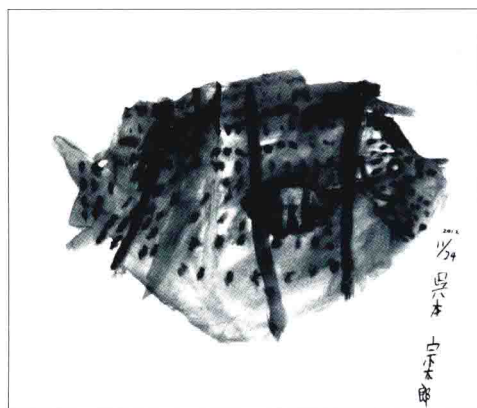
日本岡山県宇部市中尾二丁目三番

吳本堯沐浴敬書

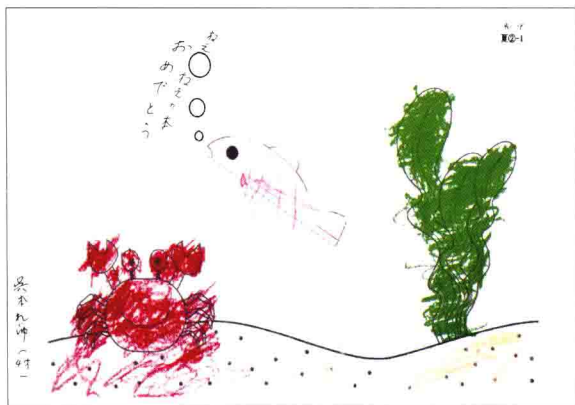
祝词 / congratulation words / 祝辞



吴本宗雪书法 / Congratulation words Yuki KUREMOTO / 吴本宗雪



吴本宗太郎画 / Sotaro KUREMOTO / 吴本宗太郎



吴本丽优 / Reiyu KUREMOTO / 吴本麗優



吴本丽优 / Reiyu KUREMOTO / 吴本麗優

四年 小島桃子  
明る  
い年

小島桃子 / Momoko KOJIMA



小島总一郎木刻画 / Soichiro KOJIMA  
/ 小島総一郎



吴本宗雪 / Yuki KUREMOTO / 吴本宗雪

## 序 一

茂云刘氏，字梅子，号杏花村女，安徽颖上人。生于1943年，学于1960年，毕业于1963年，彼时为合肥卫生学校高材生。茂云先后在皖西北利辛县医院、阚町集医院、阜阳地区医院从事医疗工作，后来到安徽医科大学第一附属医院肿瘤科、安徽医科大学第二附属医院病理科任职，工作专业是病理细胞学诊断与研究。她一生努力工作、刻苦学习，曾经到国内一些高等医学院校进修学习。还得到中国医学科学院肿瘤研究所杨大望教授的亲自教导，并推荐远赴东洋留学，在日本国饭田市立病院病理科研修，博得东瀛朋友的喜爱。学成归国后，仍就职于安徽医科大学第一附属医院从事临床肿瘤病理诊断良恶性工作。她每日门诊接待病员30~60人次，任劳任怨，兢兢业业，不讲条件，不计报酬，倾情奉献。因医技医德出众，数十年工作中，从未有医疗纠纷和差错事故，深得群众和患者的爱戴与信赖，直至65岁退休仍退而不休，情系杏林。

茂云自幼随父学画，学业画画两不误。一生行医，以医施教；业余泼墨，丹青娱人。从医50年，抚琴20年，书法40年，作画60年。绘画以中国花鸟、山水见长，画风古意，技法传统，笔墨灵动，妙趣天然。

茂云之父朝伍先生经常教诲女儿，“作画要纵逸豪迈，用笔要潇洒奔放，着色要和諧雅淡……”并要求爱女学习或临摹唐宋之后的名家，贵在不求艳丽，只求浓淡得体，黑白相用，干湿相成，虽无色彩，但也五彩斑斓。茂云从此反复揣摩，心领神会，画艺渐臻新境。在特殊年代，茂云画过大量宣传画、广告画及漫画，积累了绘画经验；书画同源，茂云也喜爱书法，正草隶篆，涉笔成趣，踏花归来，一派芳菲。梅花兰草玫瑰牡丹、山茶芙蓉紫藤秋菊、苍鹰仙鹤鹦鹉麻雀、蔬果虫鱼苍松翠竹等等都是她笔下永恒的主题。

茂云擅画牡丹，光亮独特层次分明，着色清雅，雍容华贵，风格凝重淳朴。著名画家徐德龙先生曾对家乡人说：谁要牡丹去找刘茂云，她的牡丹比我画得好。老画家赞美之辞广为传诵，顿成佳话。

茂云尤喜画梅，墨梅霜枝，雪干风骨，凌增天意，梅诗多禅。履施刘氏家传，红梅亦灿烂繁华。《红梅赞》诗云：红梅迎风开北国，冰雪横斜遍山野，花蕊倔强傲霜骨，暗香压枝生玫瑰。

茂云酷爱金秋，秋韵作画，善写秋菊。笔墨坚挺，色彩浓郁。气魄厚重，每画做成，赋诗题跋，如九月黄花篱边开，孤高傲霜沐秋色；吾欲持酒对菊歌，登高一笑倚壁



眠。国画家赵景庵先生说，茂云的画，有男人气魄。是的，她像吴昌硕大师一样画作重“气”。做大画，气意相合，收放自如；做小品，以小见大，高瞻远瞩，显示了她传统的艺术功力和医学素养的大家之气，具有一种强劲浑厚的力感。从不轻浮，从不飘滑。这一特色非同一般画家，正是茂云独具的绘画风格。

《茂云色纸集》里《收获》中题诗：“隆隆天地转，烘炉铸精神，本炎爱此树，常常梦中锄，一日母好奇，失手铁树枯，今日持拙笔，再现昔日情。”乡亲们阅后热泪盈眶，可见她的书画感人肺腑。《怀念富士山》中的深秋芦花、丹顶鹤绕过雄伟的富士山，也是催人无限怀念的场面。富士山和丹顶鹤是茂云最爱的自然景物，芦花则是茂云的日本朋友条田启子女士最喜爱的秋草。此画正可视作是中日友情常青的见证。

吴报任先生这样评价茂云：5岁能诗，7岁作画，10岁习书法，小学时出类拔萃，青年时引人注目，中年时成果丰硕。他说：20岁时我从赏画认识了她，喜鹊登梅、牡丹蝴蝶、唐人小楷题跋，无不秀美异常；其一笔一画、一枝一叶，无不精神饱满。书画体现了她的人品和画风，我从爱画到爱茂云，茂云成为我终身好友和幸福伴侣，实在是人生有画、人生有诗、人生有情，此乃三生有幸也。

当然，茂云的书画还有许多价值高贵的艺术探索，值得我们深度研究。本文囿于篇幅，无法延展，愿读者从茂云先生流传的5000余幅作品中去发现、去品评。也希望国内外有识之士对她的作品予以细细玩味追寻。

《刘茂云画集》问世了，谨以此为贺。是为小序。

吴本舜（次子）

2013年6月于日本

# Foreword 1

## **Doctor and Painter**

Every time when I introduce my family, I start from my mother, she is my proud, not only because she is a doctor, working as a cancer inspection specialist at a large public hospital in Anhui, China, but also for her well performed Chinese painting. She has had several personal exhibitions at galleries and museums in Japan. For her 3rd book of painting publishing, I am excited to write something as a foreword.

## **As an illustrator in the Culture Revolution**

My mother was born in a little bit rich family, my grandfather was an owner of a cloth shop at Yingshang, Anhui Province before the Liberation. According to my mother's memories, he wrote a very good calligraphy, unfortunately I have never seen his works, he died very soon after the new government communized his shop. My mother might have the genes from my grandfather, she became very famous in her hometown for her nice painting.

After the graduation from the medical school, she became a doctor in the countryside of Northern Anhui, where she met up and married my father. My father was born in a traditional scholar's family. He started the Shufa (calligraphy) training when he was five years old. The young couple was persecuted by their family but they never became negative and never complained. On the contrary, my mother worked faithfully for the Culture Revolution. The Poster, slogan, animation and illustration, all these promotion materials had to be handwritten at that time, my mother devoted herself by using her art talent to prepare them for the Communist Party.

## **Professional or Amateur**

After the Culture Revolution, my parents moved to a city from the countryside. My mother started to learn Guohua constantly from the masters who taught Chinese Painting in the university. For most female painters, Gongbi maybe their first choose, because normally women are good at meticulous works. However, my mother loves Xieyi (freehand style, ink and wash painting) from the beginning, she resists that only Xieyi can represent the spirit of traditional Chinese painting. She draws a lot of themes from bird-and-flower to landscape. Peony and Chinese plum tree works are well-known in her local country. The famous peony

painting master, Prof. Xu Delong once asked her to quit her hospital job and to become a professional Guohua Painter. She hesitated but disagreed finally. She is enthusiastic on Guohua but she knows clearly that a mass of patients need her medical knowledge and skill to help them be free from their pains. So she pays more efforts than others. I remember that almost every weekend, she concentrated on painting practice. Sometimes, she even got up very early, maybe 3 or 4 a.m., just to paint. People often ask her why she is working so hard on painting, her answer is short but firm—No why, I love painting!

### **Kanfu in Chinese Painting**

Kanfu is always known as the Chinese martial art, but it is also a common criteria to one's Guohua performance. In Chinese, Kanfu also means effort and endeavor, it is hard for Western to understand why Kanfu is also described for painting. From my opinion, it is the main difference between Chinese painting and Western arts. Chinese painting emphasizes on hard working, well practicing and training, while Western arts pay more attention on talent, innovation and idea. So a man with average ability, in case of continuous practice, he could become an outstanding Chinese painter, as well as an excellent calligrapher.

Several years ago when my mother showed her works in a small gallery in Nagano, Japan, a Japanese painting enthusiast happened to see the works and made his comment, "It should be from a Chinese painter, it quite similar to Japanese painting, but I can feel the power and energy from the painting, it is definitely from Chinese! "I appreciate his comment very much, yes, my mother has paid more than 50 years' efforts on Chinese painting, and the energy has been transferred to her paintings.

Please take a try from this book, even in print, you may feel the energy, taste the stamina from these traditional but mysterious Chinese paintings!

Shun Kuremoto

(Son of the author)

June, 2013 from Japan

## 出版に向けて

母は医者で、母の趣味は中国画の描きです。

家族を紹介する場合になったら、私はよくこのようなセリフを使います。

「へえー」とか、「オォ!」とか、「すごいね」など、半分驚き、半分羨ましそうなアクションが返ってきます。

「でも、」どう返すか、今度私は悩みます。

「女医」、「描きの趣味」とのキーワードだけで、上品で優雅に生活しているマダムの子が浮かぶかもしれませんが、私にはちょっと違和感があります。

一言で言い切れない感じがあります。

始めはアートでなく宣伝のため

若い頃の両親は中国の文化大革命の最中に、安徽省の田舎で知り合いました。お互いの「画が好き、書は上手」は共通点で、これが結婚の決め手となったかどうかわかりませんでしたが、回りからは「仲良し夫婦」と見られています。私が4、5歳ぐらいの頃もよく画を描いたりしていたらしいですが、あまり覚えていません。覚えているのは、母さんがいつも机の上で、なにかを描いている姿です。集中しているせいか、三人の子供が泣いたり、喧嘩したりしていても、全く動じない覚えがあります。家の中でも、至るところに作品が貼っていました。美術作品とは言い難いかもしれませんが。なぜなら、組織に頼まれて、文化大革命の宣伝道具です。両親の出身身分は地主で、文化大革命の時、いじめられる、批判される対象です。若い両親は自分の清白を証明するため、描き上手の特長を生かし、一緒懸命に働いていました。ポスター、スローガン、漫画、イラストなど、あらゆるものを手書きで作っていました。今から見ると、とても狂って滑稽な時代でしたが、幼い私からみると、あれもこれも、元気一杯、気迫満点な作品でしたので、純粹に喜んで、楽しかった時代です。

パンを買うか、顔料を買うか

文化大革命が終わると、田舎から少し大きな町に引越しをしました。母の務める病院も大きい病院なので、忙しくなりました。宣伝画など殆ど描かなくなりましたが、伝統的中国画を描き始めました。伝統的中国画を描くのに、文房四宝、すなわち、筆、墨、紙（宣紙）と硯が必要です。筆と硯は長持ちですが、墨と紙は消耗品



なので、確保するのは大変でした。当時、我が家は貧しい家庭でした。両親の給料を合わせて、100元（約1500円）に達しなかったけど、高校に入った兄、中学校に入った私と小学生の妹は食べ盛りでした。腹一杯になることは殆どありませんでした。それでも、母は色んな工夫して、新聞紙で描いたり、水で描いたりして、稽古に止まりませんでした。徐々に地元で有名になって、画を求めに来る人が増えてきました。「画をただで差し上げでもいいけど、紙と墨を持っておくれ！」母は暗黙のルールを作りました。安徽省は、宣紙の発祥の地なので、一般の家でも中国画を飾ることが盛んでした。宣紙は高いものと皆が分かっている、画を求める度に、1枚、2枚、少しでも出してくれました。おかげさまで、母は色んな種類の宣紙を試すことができました。

それでも、練習のため、顔料や墨が足りなくなっていて、私を買いに行かせることが屢々あります。1角（0.1元）の小銭を持って、バラ売りの顔料を買いに、文房具屋さんに行くことは、今でも覚えています。途中で、「顔料を買うのを辞めて、お菓子を買って持って帰ったら、兄弟はどのくらい嬉しいだろう？」何回も思ったことがあります、一度もお菓子を買ったことはありません。画を見ながら、母親のあの笑顔、あの明るさ、家族皆にとって幸せな時間です。

#### プロに転向しなかった理由

父親が大学で数学を教えていたから、家も大学のキャンパスにありました。総合大学なので、美術課もあります。母はよく美術課の先生に教わってもらっていました。阜陽師範大学中国画学部の徐徳隆教授はボダン書きの名人です。「徐悲鴻の馬、齊白石のエビ、私のボダン」と良く自慢していました。ある夜、私も母親の同行で、徐先生の宅に伺いました。母の描いたボダンを見ると、顔を涼んで大きな声を出しました。「おい。劉さん。まずいな。。。お前、医者だろう。これでうちが食えなくなるのよ！プロになるのか、画をやめて医者続けるか、決めてくれ！」私は褒めていたのか、怒っていたのか躊躇しているうちに、母は大いに笑っていました。先生のご冗談でした。合肥市の「梅描きの名人」王石誠先生に教わっていたとき、同じことが言われていたらしいです。表向きに母は「そんな実力ないよ」と謙虚しているが、家の中で「プロの世界のしがらみが嫌だ！中国画画家はスポーツ選手のようになれないから、基準は難しい。私はひたすら描くことが好き！評論は他人任せだ！」

いつも本音を吐いてくれました。

#### 画き続けて50年

あっという間に、画き続けて半世紀を過ぎました。上手になったか、下手になったか、両親の間でもよく議論しています。全く気にせず、書き続けているのは母です。

40年の病院勤務を経て、やっとゆっくり引退生活ができたかと思ったら、ガンの検査診断を専門とした母に、複数病院からのオファーがありました。70歳を超えている今の母親は更に忙しくなっているのに気づきました。